

バスケットボール競技におけるディフェンス法の考察

Defensive strategy of basketball

1K06B181

指導教員 主査 倉石平先生

東 達也

副査 磯繁雄先生

【緒言】

バスケットボールにおいてディフェンスの優劣が勝敗に大きく影響することは明らかである。オフェンスは個人のパフォーマンスによる部分が大きく、とくにアウトサイドシュート(ペリメーターより外のシュート、3Pラインから1メートル離れた所までを言う)に至っては、チームとしてノーマークを作ることではできても、そのシュートが入る確率は良くて50%、悪い時は20%という場合もあり得る。2) また、近年では情報分析活動注7)など行なわれるようになり、相手チームの特徴をデータに収め、数値化して策略を練るようになってきた。そのようなこともあり、「ディフェンスの意義は、近代バスケットボールにおいて益々増大している。ディフェンスを徹底的に練習するコーチは、より強い相手に対して、自分のチームがより多くのチャンスを持つことに素早く気づくほどになるだろう」1)言われている。

私が所属している早稲田大学バスケットボール部のディフェンス注5)では、オフェンスをサイド・ライン側もしくはエンド・ライン側へ追い込んでいく「ファン・ディフェンシブ・フィロソフィー」1) というシステムでチーム・ディフェンスを行っている。そのような背景から、果たしてこのディフェンスが機能しているとき、相手チームのシュート成功率やターン・オーバー発生率にどのように影響しているか調査する必要があると考え、本研究を行うに至った。

【方法】

本研究では、第85回関東大学バスケットボールリーグ戦における早稲田大学がゲームを行った

全14試合を分析対象とし、コート縦を3等分し、1回の相手の攻撃時におけるミドル・ポジションのボール保持時間、サイド・ポジションのボール保持時間を抽出し、その時のシュート成功率とターン・オーバー率について分析した。

【結果】

全試合のシュート成功率は、ミドル・ポジションの保持時間が多いシュート成功率は39.9%、サイド・ポジションの保持時間が多いシュート成功率は31.2%となった。また、ターン・オーバーの発生率は、ミドル・ポジションの保持時間が多い場合のターン・オーバー率は13.1%、サイド・ポジションの保持時間が多い場合のターン・オーバー率は14.4%であった。

【考察・結論】

今回の研究で、総合結果には大幅な差異は見られなかった。理由としてオフェンスのファスト・ブレイク、セカンダリー・ブレイク、アウトナンバー(1:0、2:1、3:2)からの攻撃をデータに含んでしまったことである。ファスト・ブレイク、セカンダリー・ブレイク、アウトナンバーからの攻撃は基本的にオフェンスが非常に有利であり、成功率も高くなっていく。そのデータを一緒に含んでしまったことがデータに大幅な差異が見られなかったと考えられる。

しかしながら、オフェンスのファスト・ブレイク、セカンダリー・ブレイク、アウトナンバーを含めた場合でも差異がみられたということは、含めない場合であればそれ以上に差異が生まれると考えられるため、本研究の結果も非常に有意義なものであると言えるのだろう。

結果から、現在の早稲田大学バスケットボール部のディフェンス・システムの方向性が正しいということが判明したと言えるだろう。

また、本研究では、コーチの考えをチームフィロソフィーとして全うし、5人全員が一方向へ向くことが成功することの重要な要素であるということも明らかにすることが出来たと考える。